

化学放射線療法を経験した頭頸部がん患者の食べることの意味づけ

原田 裕美（応用看護学）

【キーワード】 管理監督者 役割ストレス 企業支援 半構造化面接

本研究の目的は、化学放射線療法（以下、CRT とする）を経験した頭頸部がん患者の食べることの意味づけを明らかにし、看護実践上の示唆を得ることである。

研究参加者は、A 県内の B 病院で、CRT を治療完遂した 1 年未満の頭頸部がん患者 10 名である。

研究デザインは、質的記述的研究とした。

データの収集は、2021 年 5 月～10 月に、半構造化面接法で一人 1 回実施した。面接時間は 18～67 分であった。

分析方法は、録音した面接内容を逐語録として文字に起こした。各逐語録を精読した後、食べることに對するその人の解釈と思われる原文を意味内容が損なわれないように文脈を重視しながら抽出した。抽出した原文を、一文一義として短文化し、コードとした。この段階で、それぞれのコードが治療前・治療期・治療完遂期・退院後（以下、4 つの時期とする）のどの時期に相当するかを判別し、分類した。次に、4 つの時期のそれぞれで研究参加者のコードを統合し、意味内容の類似性に従ってサブカテゴリー化・カテゴリー化を行った。データが豊富であった治療期はコアカテゴリーまで抽出した。その後、カテゴリーの関係を可視化した。全過程において、質的研究に精通した看護学研究者 2 名のスーパーバイズを受け、解釈の真実性と信用可能性の確保に努めた。

分析の結果、すべての逐語録から 801 のコード、156 のサブカテゴリー、45 のカテゴリーが抽出できた。そのうち治療期は 408 のコード、79 のサブカテゴリー、28 のカテゴリーを占め、さらにコアカテゴリーとして 8 つ抽出できた。コアカテゴリーは

【食べるために踏ん張る】【食べられなくなることへの焦慮がある】【耐え抜くために様々な栄養投与を選択する】【食べられることに安堵する】【食べることができず落胆する】【口から食べるができない苦痛がある】【食べられないことは仕方がないと思う】【胃瘻への疑心がある】であった。これらのカテゴリー・コアカテゴリーは CRT を経験した頭頸部がん患者の「食べることの意味づけ」と位置づけられ、肯定的なプラスの意味づけと、否定的なマイナスの意味づけがあった。また、患者の「食べること」の中核には、治療前で《何としても口から食べると決意》し、治療期は【耐え抜くために様々な栄養投与を選択する】【食べるために踏ん張る】、治療完遂すると《食べるために頑張る》りながら、退院後は《口から食べることにこだわりを持つ》《食べるために再起する》の意味づけがあることが明らかになった。これらのことは、患者が口から食べることを基盤として、様々な苦痛に対して自分なりの努力を重ねながら治療に臨んでいることを示していると考えた。そのため看護師は、これらの患者の意味づけを十分認識し、治療前から患者自身の力を引き出し、高めていけるような支援が必要であることが示唆された。